

## 吉田松陰の長崎遊学と地役人

本会幹事 日宇孝良

吉田松陰(1830~1859)は坂本龍馬・高杉晋作と並んで私の好きな歴史上の人物である。二十数年前、県立長崎図書館勤務の時、プチャーチンの通詞を勤めて同行した本木昌造の足跡を訪ねて、伊豆を旅行したことがあった。下田の資料館で、ペリーの船に乗るべく密航を企て失敗して、下田の牢に幽閉されている松陰像を見つけたとき、疾風怒涛のように激しく行動している松陰の息吹を感じる思いがした。その時、退職後吉田松陰を本格的に調べ、何らかの形で松陰像を一冊の本にまとめたと思った。しかし、現実にはそれを実現する強い意志力や能力に欠け、日常性に埋没しつつ今日に至っている。本稿は前に発表したことのある一文を一部手直したものである。

吉田松陰の著書の一つに『西遊日記』がある。嘉永3年(1850)、20歳になった松陰が、山鹿流兵学の師の居住する平戸藩と、異国に開かれた町長崎に遊学したときの日記である。長崎には平戸に行く前の9月5日(以下いずれも和暦)~11日までと、平戸からの帰路11月8日~12月1日まで滞在した。松陰は、9月9日に唐人屋敷と出島を見学し、11日にはオランダ船に乗船した。この船はde Delft号といい、新商館長F. C. Roseを含む39人が乗船して来港したものであった(『和蘭風説書集成』)。松陰は船中で蘭人より「酒と糠」(ワインとパン?)でもてなされた。また、船を雇い西泊の番所や石火矢台などを海上から見学した。兵学師範の家を継いだ松陰は、長崎警備の様子を自分の目でつぶさに見たかったのだろう。

古川町で長崎奉行内藤阿波守(嘉永2~5年 長崎奉行)の通行に遭遇している。



西泊番所跡(筑前藩と佐賀藩で隔年警備)



長州藩蔵屋敷(現・長崎県自治会館)

松陰が滞在したり、訪れた長崎市中の主な場所を列挙すると、長州藩蔵屋敷(興善町)、崇福寺、皓台寺、諏訪神社、平戸藩蔵屋敷(大黒町)、唐館(唐人屋敷)、蘭館(出島)、福濟寺、春徳寺、東海の墓、茂木(松陰はこの地から天草の富岡に渡った)等である。嘉永3年11月22日西

松陰が長崎滞在中、何回も訪れた人物に高島浅五郎・鄭幹輔・大木藤十郎がいる。高島浅五郎(1821?~1864)は、西洋砲術の先駆者として有名な高島秋帆の長男で、自らも徳丸原での演習の際、第2銃隊長として指揮を取った人物で、鄭幹輔(1811~1860)は、唐通事で、満州語や英語研究の先駆者だった。大木藤十郎(1785?~1873)は、御役所附船番触頭を長く勤め、秋帆と並ぶ西洋砲術の大家であり、多くの諸藩士に教授した。松陰に高野長英の『戊戌夢物語』を貸したのは彼だった。嘉永6年(1853)ロシアの使節プチャーチンが長崎に来航したとき、松陰は密航を企て3度目の長崎入りを果たしたが、わずか5日間の滞在中に3度も藤十郎に会っている(『長崎日記』)。

鎖国下の情報集積都市・国際都市長崎は、松陰のような諸藩の遊学者に教授できる、教養ある地役人(町年寄・乙名・通事・通詞・船番などの役職にある町人)が数多く存在する教育・文化都市でもあった。